越中福岡の菅笠製作知識伝承体系

11910039　梶田ひより

はじめに①

【先行研究】

◦ 山崎（1977）

地場産業の定義として、以下の5点を挙げている。

①特定の地域に起こった歴史が古い

②特定の地域に同一業種の中小零細企業が地域的企業集団を形成して集中立地している（「産地」を形成している）

③生産、販売構造が社会的分業体制を特徴としている

④その地域独自の「特産品」を生産している

⑤市場を広く全国や海外に求めて製品を販売している

はじめに②

【先行研究】

◦ 須山（2003）

1970年代以降の地場産業研究の動向についてまとめている。地場産業研究は、生産構造変化といった産地の「変化」に注目したものから、産地の「存続」に注目したものが主流となった。

◦ 須山（1992・1993）

輪島漆器業において、質の高い労働力を再生産する徒弟制の存在が産業の存立基盤としてあることを明らかにした。

→この製作技術を取得するには実務経験が必須であり、このような技術は工業地理学でいうところの「暗黙知」にあたる。

はじめに③

【先行研究】

◦ 友澤（2000）

産業集積地域は知識経済化が進む現代社会において、暗黙知を提供する場として必要であると述べている。

→地場産業地域も先述の定義②より、同一業種が集中立地していることから、産業集積地域の一つであると考えられる。

◦ 筈谷・阿部（2021）

悲劇の記憶を対象に、記憶の継承には「空間」の存在が重要であると述べる。この空間があることで、観光や訪問学習が展開され、結果として地域を超えた継承活動が可能になった。

はじめに⑤

◦ 地理学におけるこれまでの地場産業研究では、労働力について、生産者として活動する後継者を生み出せるかどうかという点に強い関心があった。

→しかし、今日の地場産業、特に伝統産業については、産業の存続という点だけでなく、それ以前に生産技術を文化として捉えて継承していくという点が重要ではないか？

↓

産業存続基盤の一つである後継者育成のさらに前提となる、技術の継承・保存に焦点を当ててる。

菅笠について①

- 小矢部川の氾濫によってできた低湿地帯に自生したスゲを用いて笠が作られるようになった。
- 菅笠づくりには、スゲの生産、笠骨づくり、笠縫い、仕上げの工程がある。最終的な仕上げは笠問屋で行われ、笠骨づくりは男性が、笠縫いは女性が行うといったように作業分担されていた。
- 笠骨づくりや笠縫いの技術は家庭内で継承されてきた。
- 機械化が進んだことで、農業用菅笠の需要減少が顕著。菅笠そのものの生産数も減少している。

図１　越中福岡の菅笠

出典：越中福岡の菅笠製作技術保存会HP
（https://sugegasa.web.fc2.com/sugegasa_03.html）

表１　菅笠生産量（幕末～明治：300万枚）

年	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2008
農業用	150	130	100	40	27	6	6	2	2	2
祭礼用	0.5	3	30	40	45	16	20	10	10	4

保存会推計：単位万枚
「福岡の菅笠保全対策提言書」をもとに筆者作成

菅笠について②

- 農閑期の副業として行われてきた。
- 笠縫いは手間がかかるため、一日に二、三枚ほどしか縫えない。
- 2013年に越中福岡スゲ生産組合が設立されたことで、スゲ栽培については組織的な保全体制が整っている。
- 日本国内に流通する菅笠のうち、福岡町産の菅笠はおよそ9割のシェアを誇る。

菅笠について③

- 2008年に「越中福岡の菅笠製作技術保存会」が発足。2009年3月に、スゲの栽培・笠骨づくり・笠縫い・仕上げ・出荷までの一貫した生産技術体系を保持している地域であることから、国の重要無形民俗文化財に指定された。
- 2017年6月に国の伝統的工芸品指定を申請し、同年11月に経済産業大臣から伝統的工芸品に認定された。国の伝統的工芸品指定の申請にあたり、2017年3月に「越中福岡の菅笠振興会」が設立された。

- 今日、家庭内における技術伝承の仕組みは解体している。家庭内での技術継承が行われなくなった今、どのようにして菅笠づくり技術を残しているのか。
- 手作業の難しさや製作時間の割には低収入であることから、後継者がなかなか定着しない。
- 国の重要無形民俗文化財や国の伝統的工芸品に指定されたこともあり、技術の保存・継承の重要性がより高まっている。

【研究目的】

福岡町の菅笠を対象に、菅笠製作技術の伝承体系の変化を明らかにし、いかにして技術の継承・保存を可能にしているのか、「空間」の存在から考察することを目的とする。

調査対象

調査対象地

◦富山県高岡市福岡町

調査対象

◦笠骨、笠縫職人

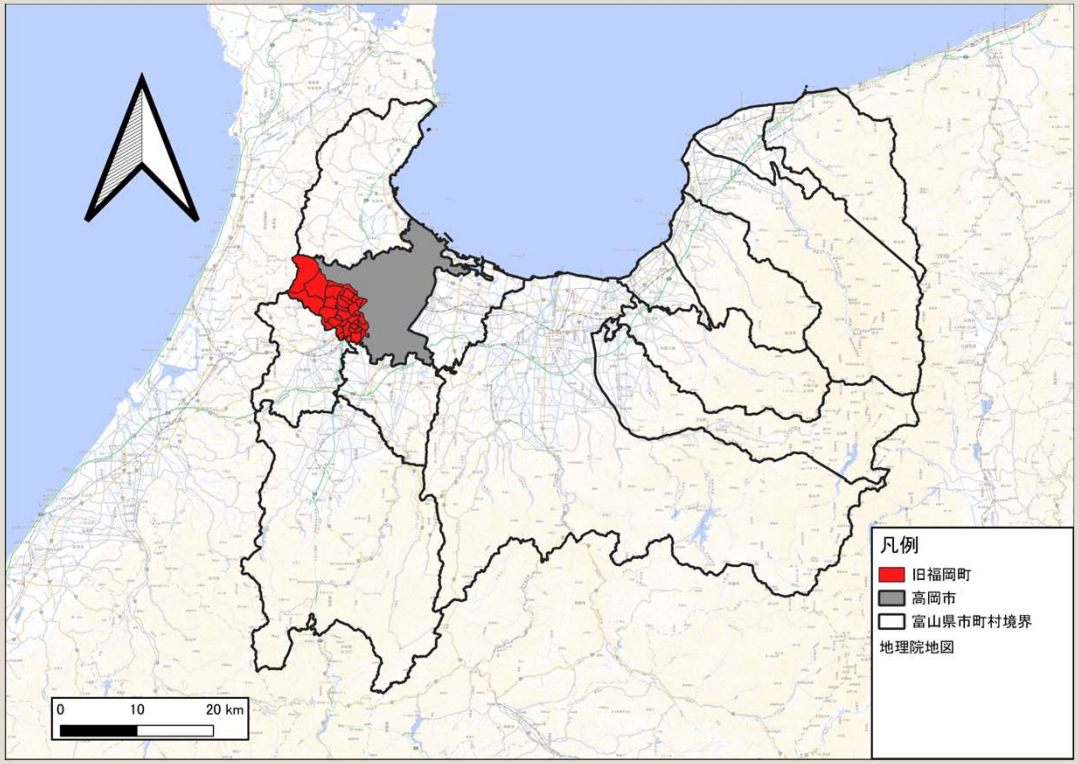


図２　調査対象地域

調査方法

①後継者育成講座（笠縫および笠骨）…A、B、C、Dさん
②個別訪問…E、F、Gさん
③匠の事業…Hさん

①～③それぞれで聞き取り調査を行った。

表２　調査対象者基本属性

	性別	現在の仕事内容	年齢	出身	備考
A	女性	笠縫 後継者育成講座の講師	70代	福岡町	・定年後に笠縫を再開
B	女性	笠縫 後継者育成講座の講師	60代	高岡市　野村	・育成講座卒業生
C	男性	笠骨 後継者育成講座の講師 スゲ栽培	40代	高岡市　麻生谷	・育成講座卒業生
D	男性	笠骨 後継者育成講座の講師 スゲ栽培	70代	福岡町	・笠骨製作技術は定年後に取得
E	女性	仲買 スゲ栽培 笠縫	80代	福岡町	
F	女性	笠縫	80代	福岡町	・定年後に笠縫を再開 ・育成講座で改めて笠縫を学ぶ
G	女性	丸輪づくり、笠縫 スゲ栽培	80代	福岡町	・定年後に笠縫を再開
H	男性	笠骨 匠の事業講師	80代	福岡町	・定年後に笠骨製作を再開

家庭内技術継承のようす

- Aさん

  笠縫い技術は親から一つ一つ教わったのではなく、親のようすを見て学んだり、縫いなどの手伝いをしたりすることで修得した。そのため、修得期間は不明。小学校4年、10歳頃から粗いものを作り、商品として扱われた。

- Eさん

  小学生の頃から手伝いを行う。小学5年の頃はノヅケができず、ノヅケのみ母親にやってもらい、シカケだけをしていた。笠縫いも、笠の上まで縫いきることができず、母親にやってもらっていた。笠の上まで縫いきれなくても、ひとまず10蓋縫えればお小遣いがもらえた。

家庭内技術継承のようす

- Fさん

  実家が仲買をしていたため、「自転車に乗って大きい麻布風呂敷に包んで運ぶ、その様子を見て育った」。子供の頃に母親の手伝いを少しだけ行い、夜遅くに自分が作った笠を母親が直してくれたことがあった。

- Ｇさん

  Ａさん同様、親の様子を見て学ぶ。笠縫を小学5年から始め、下仕事に関しては学校に通う頃にはしていた。小学5年の頃は笠の半分まで縫えればお小遣いがもらえた。1枚として縫ったのは中学入学後で、商品として縫ったのは中学終わり頃であった。

家庭内技術継承のようす

- Hさん

【小学校卒業前】

小輪をつける作業の手伝いをする。一日あたり10～20蓋分ほど行う。

【小学校卒業後】

父親の下で笠骨づくり技術を手取り足取り教えてもらう。

最初に一年かけて中骨を削る作業を教わり、その後中骨の組み立て方と外輪骨の作り方を学ぶ。中骨削り～外輪骨づくりを一人で行えるようになるまで3年間を要した。笠骨づくりの基本は親から学び、応用的な内容は自分で習得。

21歳のときに親から別れて独立。25歳頃からは働きに出るようになった。

菅笠づくり後継者育成講座

- 保存会が開催している育成講座。笠骨づくりコースと笠縫コースの２つがある。現在は福岡支所三階大会議室にて毎年8月～翌年3月まで、計20回行う。
- 保存会員になれば誰でも申し込み可能。
- 講座では2名の職人が講師として指導を行い、わからないところは丁寧に教えてもらうことができる。笠縫コースでは手順をまとめたパンフレットが受講者に配布されていた。
- 性別に関係なく参加者が集まり、最大で3年間の学習が可能。

表３　「菅笠づくり後継者育成講座」の参加者

単位：人

年度	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
笠骨	11	9	9	4	6	6	7	7
笠縫い	27	34	36	16	16	10	7	10

（資料より作成）

菅笠づくり後継者育成講座

- 学べる内容は製作技術の基本的内容にとどまるものの、さらに高度な内容を望む人のために、職人とのマンツーマンによる講座も用意されている。
- 参加者は特に福岡町以外の富山県内から参加する人が多い。保存会職員や講師によると「旧福岡の人が来たことは全然ない」とのことである。ただし『保存会通信』によると、過去のマンツーマンでの講座には地元民参加の様子がみられた。

【保存会以外の地元による菅笠教室】

- 加茂長寿会による笠縫い研修
- 上向田地区　笠縫い講座

菅笠づくりに関わったきっかけ

【育成講座参加の経緯】

◦ Bさん

定年前から、定年後に何かしようと思っていたところ、『市民と市政』で育成講座の存在を知った。新しいものへの挑戦。

◦ Cさん

『市民と市政』を見た妻から育成講座の存在を知る。最初は好奇心で始めた。

◦ Dさん

問屋からスゲ栽培する人が足りず困っているという話を聞いた。その問屋の息子から「（スゲ栽培を）やってくれんか」と頼まれた。そのうちに笠骨づくりも学ぶように。

◦ Fさん

80歳になった頃、やっぱり外に出たいと思い、育成講座に挑戦した。「昔の母親、おばあを見てやってみたいなと。私にもできるはずだと思って。」

→聞き取りを行った職人は、気軽な気持ちで講座への参加を決意した人が多かった。

菅笠づくりに関わったきっかけ

【菅笠づくりを再開したきっかけ】

◦ Aさん

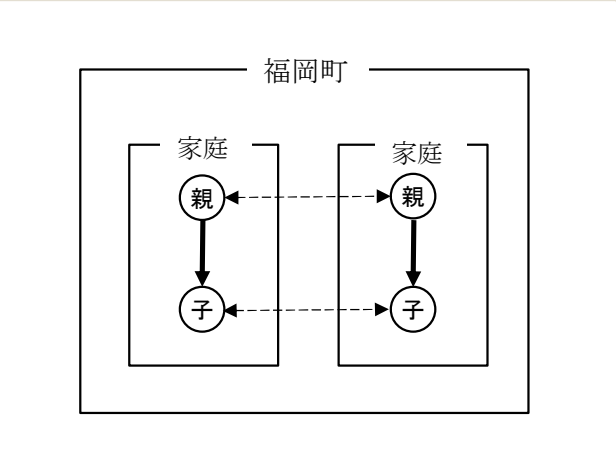
山の方のおばあちゃんたちが新聞に載っているのを見て、「いつまで続けるんやろう、なくなったらさみしい」と思った。「また縫ってみたい」と友人に話して回っていたら、友人が問屋に話をつけてくれた。

◦ Hさん

保存会から講座の講師を頼まれたから。

→福岡町出身の職人による話では、地元住民同士の縁によって笠づくりに関わるようになったというパターンが見受けられた。

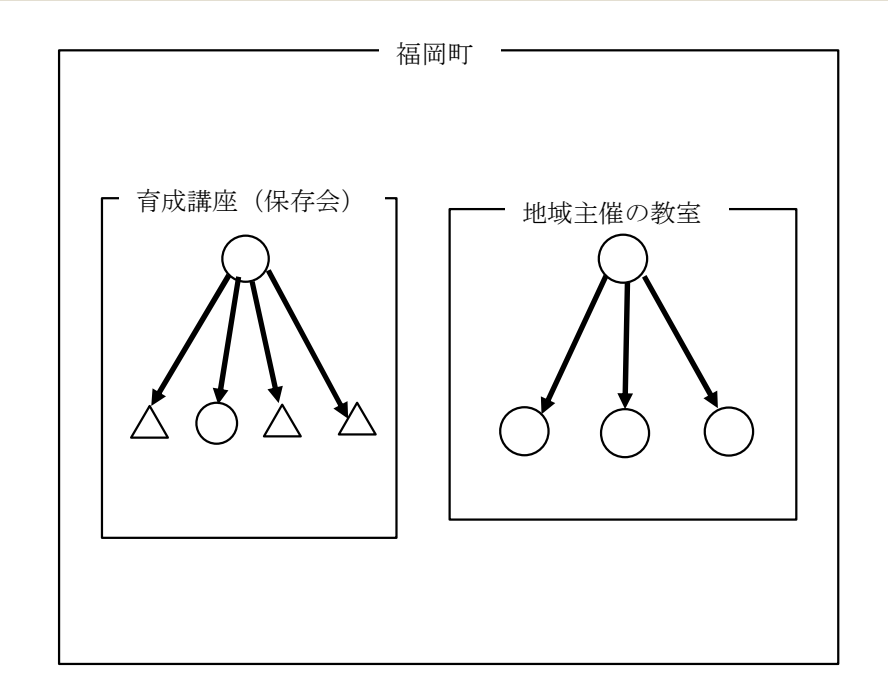
菅笠づくり技術伝承体系の変化



凡例：　→ …技術授与　- - → …技術共有　○ …地元住民

図３　1950年代頃までの福岡町における技術伝承体系

（聞き取り調査および資料より作成）



凡例：　→ …技術授与　○ …地元住民　△ …福岡町外の住民

図４　現在の福岡町における技術伝承体系

（聞き取り調査および資料より作成）

空間の存在と製作知識継承の関係性

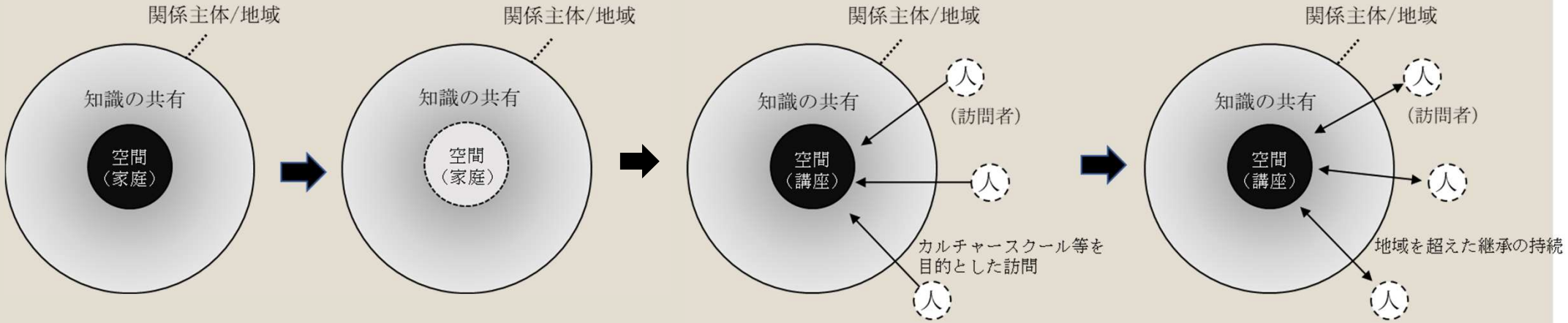


図５　空間の存在と製作知識継承の関係性
（筈谷・阿部（2021）をもとに作成、加筆した）

考察

【昔】

◦ 現在活躍している福岡町出身の職人の幼少時代には、家庭内での技術伝承が行われていた。

◦ かつては住民同士が集まって笠づくりを行うことがよくあった。

→住民同士で知識（＝技術）の共有が行われた可能性がある。

【現在】

◦ 家庭内で技術伝承が行われなくなった。その代わり、保存会による育成講座や地域で開催している菅笠づくりの教室が技術伝承の場として提供されている。

◦ 育成講座等の技術を学ぶ場には、福岡町だけでなく他の地域に住む人が集まっていた。

◦ 聞き取りを行った職人は、気軽な気持ちで参加を決意していたことがわかった。

→家庭内や近所の範囲にとどまらない知識（＝技術）の流動が起こっている。

→菅笠づくりの知識が他地域の人々に蓄積され、保存が可能になっている。

→好奇心からの参加でなかったとしても、保存会員になりさえすれば誰でも講座に参加できるというハードルの低さ。

参考文献一覧

- 越中福岡の菅笠振興会HP
（ https://sugegasa.jp/ ）（2022年8月3日確認）
- 越中福岡の菅笠製作技術保存会HP
（ https://sugegasa.web.fc2.com/index.html ）（2022年8月3日確認）
- 古池嘉和・橘美和子 2015. 越中福岡の菅笠の製作技術保存に関する一考察. 武山良三編『都萬麻』富山大学出版会.
- 須山聡1992. 石川県輪島市における漆器業の発展. 地理学評論 65A-3:219-237.
- 須山聡1993. 職人の地域的移動パターンからみた輪島漆器の生産地域の拡大. 地理学評論 66A-10:597-618.
- 須山聡 2003. 地場産業研究の動向と課題. 高橋伸夫編『21世紀の人文地理学展望』. 古今書院：186-194.
- 友澤和夫2000. 生産システムから学習システムへ—1990年代の欧米における工業地理学の研究動向—. 経済地理学年報 46:1-14.
- 筈谷有紀子・阿部大輔2021. 空間の残存と悲劇の記憶の継承メカニズムの関係性に関する考察. 日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集 19:57-60.
- 福岡町史編纂委員会編. 『福岡町史』福岡町.
- 『福岡の菅笠保全対策提言書』2015. 福岡の菅笠保全対策委員会.
- 山崎充1977. 『日本の地場産業』. ダイヤモンド社.